The Japan Association of College English Teachers (JACET)

this time for if it wasn't for a chance to get Clem. That nigger has had it coming to him ever since he came to this country. He's a bad nigger, and it's coming to him." (E Caldwell)

を挙げることができる。それでも、次例

(14) I had dinner waiting. Where have you been for the last... (W.Trever)

の説明は Hornby では不十分である。従って、学習という観点からの結論として、この形式には Hornby の説明の他に「主題関与者を明確に打ち出す状況描写表現」との説明項目を付け加えるべきである。

「現代英語に於ける進行形の根本的意味」

好田　　實

英語の迂言形「be＋現在分詞」、一般に言う進行形のもつ意味は、Quirk *et al* (*A Comprehensive Grammar of the English Language* 1985) によれば、状況の①「継続」、②「限られた継続」、③「完結の不必然」(not necessarily complete)から構成される。(1), (2) でそれは明らかである。

(1) Joan waswriting a letter. －①, ③

(2) Joan is singing well. (Cf. Joan sings well.) －②

①, ② は「一時性」(temporariness) に集約され、③ の「不完結性」と相俟って「進行相」の骨格を成すのだが、本発表では、いずれがより根本的な意味であるかを追求する。

結論を先にすれば、「一時性」が本義である。不完結は進行形以外でも表現される。

(3) John is a fool.

(4) Sato lives in 0saka.

(5) War solves no problems.

(3), (4) の動詞は状態動詞で、その非有界性 (unboundedness) は不完結相と似たものであり、このことから一般に状態動詞は進行形を採らないと言われるが、多くの反証によってそれは否定される。John is being a fool や Dick is being helpful を説明するのに、状態でなく「行為」を表すとか、*he is being tall に反して「自己制御的」だから可能だとするのは、不完結相にこだわって犯す誤りである。Self-controllability という足枷よりも、語用論的にもっと緩い制約、すなわち話者の主観による feasibility を考えるべきで、he is being tall も「不思議の国のアリス」的世界では適格文となろう。Leech (*Meaning and the English Verb* 1987[2]) が「状態動詞」の例とする (5) では、状態性が動詞から来ているのではない。真理や習慣も状態である。そして習慣も一時的なものは進行形で表現される。

(6) He is walking to work these days.

ある状況が継続中と言うとき、どの時点でそうなのかという話者の視点とも言える基準時 (time of reference) が必要であり、それは発話時と重なるときもあれば、過去や未来のある時であったりする。多くの場合副詞(句)や副詞文句の形で

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

文中に明示されるし、文脈で分かるときもある。次の2例

(7) He is leaving tomorrow.

(8) He was leaving tomorrow.

では、tomorrow は Reichenbach (*Elements of Symbolic Logic* 1947) でいう「事件時」であって基準時でないことに注意すべきである。「発話時」と「過去のある時」がそれぞれの基準時である。

また、冒頭の ③ での「必ずしも完結的でない」という言い方は控え目に過ぎる。She was crossing the street は予想や文脈から分かることに関係なく、進行形の部分は「表現」としては、あくまでも「不完結」である。また、不完結は副次的なもので、進行形の本質を説明するものとして勝れている「基準時において叙述が 100%妥当であり、前後の時間にその妥当性が逓減する」という Joos (*The English Verb: Form and Meanings* 1964) の temporary validity の説にそれは含まれている。Joos の欠陥は今日の進行形用法に多い主観的モダリティ表現を、客観的に存在する「一時的妥当性」と峻別しなかったところにある。Joos を修正して、van Ek ("'The Progressive' Recosidered," *English Studies* Vol. 50, 1969) が唱えた objective relevance と subjective relevance の区別は、temporary validity を示して進行形を用いることの適切さについてのもので、modality とは言っていないが、後者は正に話者の主観的なモダリティ表現である。次の

(9) Joan was singing a song when I passed her room.

(10) I told Atticus I didn't feel very well and didn't think I'd go to school anymore if it was all right with him...
"No I can't," said Atticus. "...dose of magnesia for you tonight and school tomorrow."
"I'm feeling all right, really." (H. Lee)

(9) が objective relevance であるのに対して、(10) が subjective relevance の例である。

しばしば例外として扱われる進行形の使用例は、話者が発話時に主観的な態度の表明として、命題内容に temporary validity を付与していると考えればよい。動詞の動作性・状態性は関係ないことである。次の have to の進行形もそのように考えると納得がいく。

(11) Managers in Japan's biggest companies are having to rethink the way they run their businesses. (*The Economist*)

(12) I was not having to be Tony Crabbe at all, sitting in the sunshine watching the day go by. (T. Wilkinson)

Baker's Paradox: A Problem in Learnability

岡田　伸夫

動詞は一定の意味役割を担う項を従える。例えば put は、行為者と受動者を従える。どの動詞がどの項構造をもつかを決定することは必ずしも容易ではない。例えば dine と devour と eat は、いずれも「食べる」という意味を含んでいるが、項構造は異なる:

NII-Electronic Library Service